司馬遼太郎

本所深川散歩
神田界隈

街道をゆく 三十六

街道をゆく

司馬遼太郎

朝日新聞社

一九九二年　四月一日　第一刷発行

街道をゆく　三十六

著者　司馬遼太郎
発行者　木下秀男
印刷所　凸版印刷
製本所　青柳製本
発行所　朝日新聞社
〒104-11　東京都中央区築地五―三―二
電話　〇三―三五四五―〇一三一（代表）
編集・図書編集室　販売・出版販売部
振替　東京〇―一七三〇

定価はカバーに表示してあります

©Ryōtarō Shiba 1992 ISBN4-02-256405-9 Printed in Japan

街道をゆく　三十六

本所深川散歩・神田界隈

本書には「週刊朝日」一九九〇年九月二十一日号・連載第九百二十五回から、九一年七月十九日号・第九百六十一回分までを収録。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目次

本所深川散歩
深川木場 9
江戸っ子 23
百万遍 37
鳶の頭 51
深川の〝富〟 63
本所の吉良屋敷 75
勝海舟と本所 85

本所の池　97
文章語の成立　109
隅田川の橋　121
白鬚橋のめでたさ　133
思い出のまち　147
回向院　159
神田界隈
護持院ケ原　175
鷗外の護持院ケ原　189
茗渓　203
於玉ケ池　217

昌平坂 231
寒泉と八郎 245
漱石と神田 259
医学校 271
ニコライ堂の坂 283
平将門と神霊 297
神田明神下 309
神田雉子町 323
神田と印刷 337
火事さまざま 349
銭形平次 363

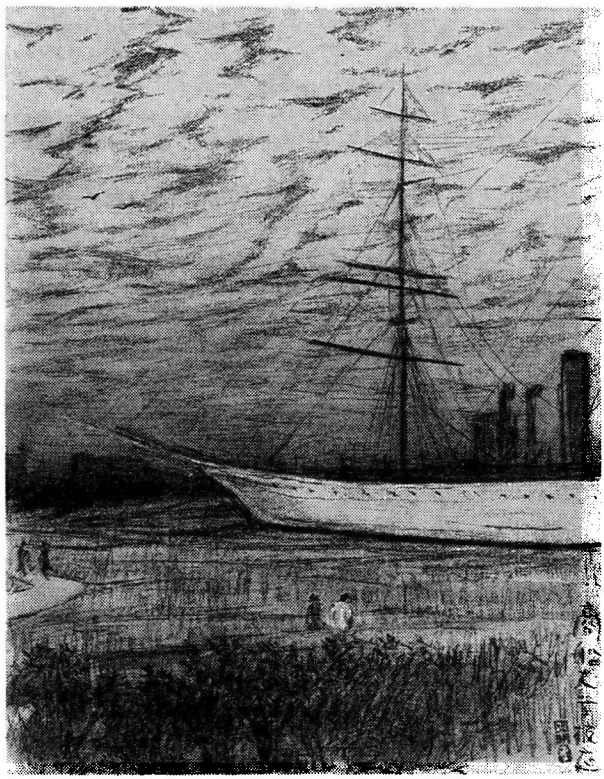
本屋風情 377
哲学書肆 389
反町さん 403
英雄たち 415
三人の茂雄 427
明治の夜学 439
法の世 451
法の学問 463
如是閑のこと 475

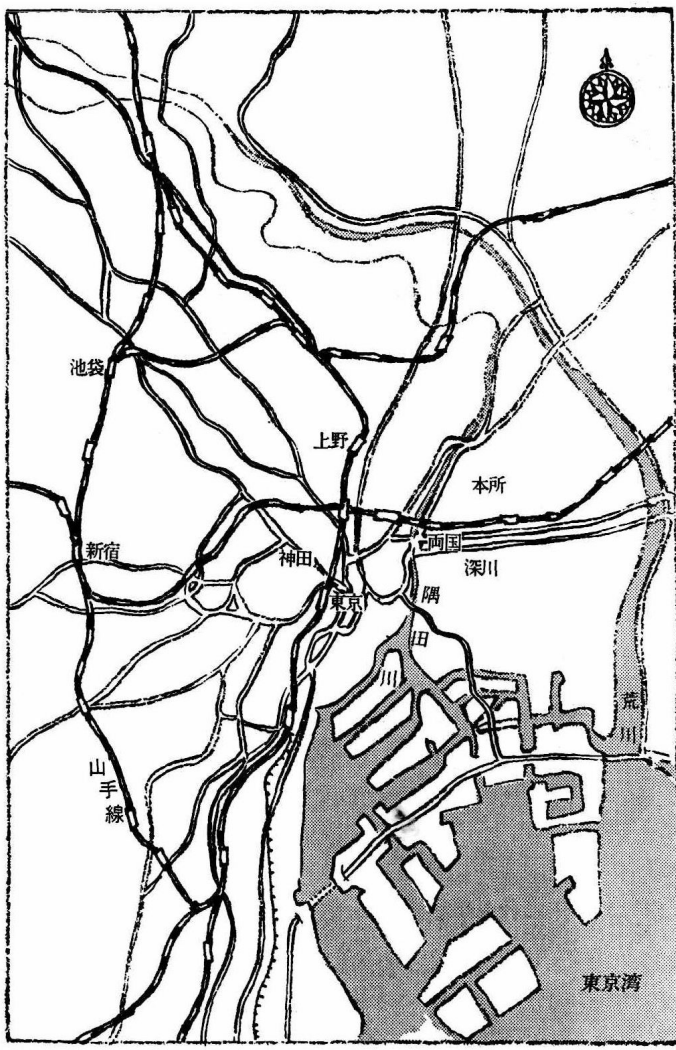
題字＝棟方志功　え＝桑野博利
装幀＝原　弘　地図＝熊谷博人

本所深川散歩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

深川木場




池袋
上野
本所
新宿
神田
両国
深川
東京
隅
田
川
荒
川
山
手
線
東京湾

世界の首都で、江戸ほど火事の多かった都市はない。
自然、材木問屋がもうかった。
近代以前では材木問屋は巨大資本というべきものだったから、その根拠地である深川という土地の存在は大きかった。
まず、材木問屋の当主たちの寄合の場として当然ながら色町が発達した。
材木商は人足をふんだんに使って、いわば男くさい商売だった。
旦那衆はともかく、木場で働く男たちのあいだでは、気っぷが重んじられた。
自然、色町の側もその風に染まり、女たちも、侠気を誇るようになった。
「辰巳芸者」
などと、よばれた。江戸の代表的遊里である吉原が北里とよばれるのに対し、南東とよばれたところから出たらしい。
江戸時代、羽織は男しか着ないものであったのを、深川芸者は女ながらも羽織を着たから、〝羽織芸者〟ともよばれた。一種の男装だった。
その男装にふさわしく、その気風は勇肌で、
「きゃん」
とよばれた。侠のことである。キャンというのは福建音かとおもわれるが、おそらく長崎で

通商する清国商人が、長崎丸山の遊廓あたりで、勇肌の芸者をそのようによんだところから帰化したことばにちがいない。

江戸で定着し、とくに深川芸者の心意気をあらわすことばとして多用された。

きゃんは、はじめは男女いずれにも通用することばだったようだが、江戸中期の安永年間（一七七二～八一）ごろから、男については、

「いなせ」

といった。

女については、接頭語の〝お〟をつけて、おきゃんとよぶようになった。〝お〟がつくと、いかにも娘らしくて、気っぷがそのまま色気と背中あわせになっているように響く。むろん下町にかぎられた形容である。

明治になってもこのことばは生きていて、『日本国語大辞典』の「おきゃん」の項には、樋口一葉（一八七二～九六）の『たけくらべ』（明治二十九年）での使用例が出ている。

今にお侠の本性は現れまする。

もっとも『たけくらべ』の舞台は深川ではなく、吉原裏である。

おきゃんは、ツケツケと物をいうものの、自分の利益とは無縁で、相手の立場を思いやるあ

まりの率直な言動と解していい。ただし一葉におけるこの用例の場合は、〝いまに下町育ちの地金が出るよ〟という程度の、かるい否定的発想から出ている。

夏目漱石（一八六七～一九一六）の『坊っちゃん』にも、用例がある。江戸っ子の〝坊っちゃん〟が、伊予松山という〝大田舎〟で悪戦苦闘するはなしながら、教頭の赤シャツらのあこがれる〝マドンナ〟嬢が、存外おきゃんじゃないか、というのである。

マドンナも余っ程気の知れないおきゃんだ。

一葉にせよ漱石にせよ、江戸っ子だからこそおきゃんという言葉が地について使えるわけで、森鷗外（一八六二～一九二二）が使えばぎこちないに相違ない。

おなじ江戸うまれといっても、幸田露伴（一八六七～一九四七）は下級ながらも幕臣の出だった。だから、露伴の文体のなかに、おきゃんという言葉を挿入するのは困難である。

以上は、前口上のようなものである。

『街道をゆく』で東京をとりあげようとおもったものの、ひろい東京のなかで、小さな一区画を切りとるについては、ずいぶん思案した。結局、「本所深川」ということにした。

とりあえず江戸っ子の産地じゃないか、とおもったのだが、本当にそうなのかどうか。

なにしろ、東京というのは〝気質文化〟において、なかなかうるさいところなのである。

「本所深川が、江戸っ子の産地ですか」

と、試みに浅草うまれのひとにきいてみると、

「はてね」

と、くびをかしげた。

むろん、山の手うまれの人などは、

「隅田川の東（本所深川）というのは、気分として遠くてね」

という。江東（隅田川の東岸）は御府内（将軍のお膝元）といえますかどうか、などと古風なことをいう。

大会社の社長付の運転手さんなどは、本所深川に昏くて、という。

「用がありませんのでね」

そんなふうだったから、他国者の当方としては、ついこの地に肩入れしてみたくなった。

江戸は、材木の大消費地だった。

ところが、関東は一望の平野で、杉・檜の山林に乏しいために、江戸の用材は海上からやってくる移入材にたよらねばならなかった。

関東でも、上州の一部や秩父に木があるが、主な産地というと、東海地方から熊野（和歌山

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c